

里山・檀林ふおーらむの記録

開催日時：平成23年9月18日（日） 午後1時30分～4時10分

開催場所：旧飯高小学校ランチルーム

参加者：48人

出席委員：（学識経験者）渡辺新

（団体推薦者）萱森孝雄、鈴木和彦、橋場永尚

（一般公募者）大塚榮一、岡田陽子、林暁男、八木幸市

（8人／名簿順）

欠席委員：（学識経験者）鎌田元弘、木村乃

（団体推薦者）安藤建子、宇野充紘、越川竹晴、越川八代枝

（一般公募者）永野亮太

（7人／名簿順）

市出席者：（事務局/企画課）木内課長、大木副主幹、勝股副主査

椎名副主査、富井副主査、越川主任主事（6人）

1 開 会

2 主催者あいさつ（渡辺新委員長）

本日、このようなフォーラムが開催できることに、正直大変驚いています。提案したのは私なのですが、あっという間に準備が整ってしまい、匝瑳市、なかなかやるなと思っていた次第です。

主催者のあいさつということですが、儀礼的に話しても意味がないでしょうから、ちょっと里山について私なりに話をしてみたいと思います。

日本語で国際語になっている言葉は結構ありますが、いま世界で一番有名なのは FUKUSHIMA(福島)、TSUNAMI(津波)です。津波はだいぶ前から国際語になっておりますが、昨年あたりからもう一つ世界に知れ渡っている言葉があります。SATOYAMA(里山)です。いまや里山は国際語です。

最近、人と自然との関わりで、里山と同じように川や海も里川、里海と呼ばれていますが、匝瑳市はかなりの距離にわたる九十九里海岸を擁しています。海岸には砂防林がありますが、この砂防も実は国際語です。SABOです。今日は触れる

ことはできないでしょうが、その砂防まで波が来てしまうような状況で、海岸の侵食は深刻な問題だと思います。そういうことを考えますと、里山、里海をトータルに考えて、人と自然との関わりという視点から匝瑳市の今後を見据えていくことが必要だろうと思います。今日は、その出発点になればと思っています。

ところで、昨年10月18日から29日にかけて、名古屋市で第10回目の生物多様性条約締約国会議が開催されました。この会議はCOP、10回目なのでCOP10と呼ばれ、179の締約国と国際機関、NGO、NPOなど約1万3,000人が参加しました。実はこの会議で、日本側から「里山イニシアティブ」というのが提唱されて、採択されています。これはどういうものかということ、環境省などが使う難しい言葉で言うと、「社会生態学的生産ランドスケープ」という言葉で表現されます。ランドスケープというのは景観という意味です。私なりにこの言葉の意味を言うと、人が自然とうまく関わりながら農林水産業を中心とした生産を維持していく仕組みということになります。こういう考え方をもって、世界の人たちと一緒にイニシアティブ（運動）を展開していこうというのがCOP10での採択ということになります。

それでは、里山というのはどういう自然かということになりますが、自然というのは人間の手が入ると、言葉を変えれば、人間が手を入れすぎるとダメになりますが、その一方で人間が手を入れないとダメになる自然があります。人間が手を入れて維持していくべき自然が、里山、そして里海ということになります。自然には原生林のような原生的自然がありますが、里山はそれとは異なり、人の手が適度に入ることにより維持されてきた自然で、「二次的な自然」、里山は山や林なので「二次的な林」＝「二次林」と呼ばれています。

私たちが里山を思い浮かべるとき、山や林だけではないですね。農地があり草地があり場合によっては水辺がある、そして集落がある景観を思い浮かべます。里山、農地、草地、水辺、集落から構成されている農村景観のことを、最近では里地と呼んでいるようです。これらはかつて土地利用を介して結びつきがあったわけで、実はこのことが生物多様性の要因ともなっていたわけです。

里山の生物は種類が豊富です。その豊かさをもたらしているのは、里山には森林性の動植物だけでなく、草原性や湿地性の動植物も生息・生育するからだと思います。例えば、里山と谷津田との間の草地といった環境でも、多くの動植物が生息しており、生物多様性を豊かにしています。その里山的自然が、人の生活から切り離されて、人手が加わらなくなることで荒廃してきているというのが現状

で、そこに生息していた動植物の危機をつくりだしています。

そういう里山の中に飯高檀林があります。今年、私は駒澤大学で教えていますが、あの大学も梅檀林といって曹洞宗の檀林が出发点で、飯高檀林は日蓮宗の筆頭檀林で立正大学発祥の地ということになっています。学問、文化、信仰、これは本来自然を対象としたものです。

東日本大震災の被災地で興味深いことがわかってきています。昔からの街道があり、その街道に沿って集落があります。そしてその集落の背後に里山があり、その里山の中に神社があります。津波はほとんどその街道と神社の手前で止まっているんです。神社の中には浪分神社、津神社というような名前もあり、明らかに人々が自然との関わりの中で暮らしてきたことがわかります。里山を考えると、私たち人間と自然との関係を考えるということであり、私たちの暮らしや営みも考えていくことだと思えます。

いま里山は、異なる主体間の連携で地域を共同管理していく仕組みづくり、高齢化が進む中で、高齢者が生き甲斐をもって豊かに生きていくためにも、そうした人たちが参加しやすい仕組みづくりが求められています。この匝瑳市で、「檀林・里山イニシアティブ」を提唱できるような、そういう日が来ることを期待しています。

3 活動報告

①タイトル：「飯高檀林コンサートの現状と未来」

報告者：飯高檀林コンサート実行委員会委員長 萱森 孝雄

まず、飯高檀林コンサートがどのようにして始まったのかというところからお話します。

きっかけは、飯高寺が昭和55年に国の重要文化財に指定された際、当時の住職さんが大変喜ばれ、せっかく重要文化財になったのだから、もっと皆さんに知ってもらいたい、来てもらいたいというような話を盛んにしていました。史跡飯高檀林跡を守る会という組織がありまして、たまたま私の父がその会長をやっておりましたので、住職さんとの話も日々聞かされてきました。

それから少したったころ、先代の住職さんの葬儀が檀林で行われました。当時、飯高檀林跡を守る会の事務局をしていた担当者が葬儀に参列していた際、100人

ぐらいのお坊さんがお経をあげたそうです。そのお経が音楽に聞こえた、ここでコンサートができれば、という思いが芽生えたわけです。しかし、お金があるわけでもないのに、何とか資金を集めながらやろうという思いで決断し、スタートしました。その企画を市の教育委員会に提案しましたら、市で予算を組んでいただけだったので、これは大変なことになったと思いました。私たちは手弁当で資金を作りながらやろうと思っていたところに、予算をいただいたわけですから、これは相当なものをやらなければならない、という感じで第1回目がスタートしたわけです。

平成元（1989）年に第1回コンサートが行われ、そのあと平成8～14（1996～2002）年は、講堂保存処理のため中断。台風で2回中止になっていますので、今年で23回のはずが16回となっています。雨天時は講堂内で開催していますが、これは修復後のことで、修復前は境内にテントを張り開催していました。ところが、音楽より雨の音の方が大きくなってしまったため、それ以来、雨の日は講堂内で開催するようになりました。

実行委員会は、実行委員長を始め地元の方や各種団体などで組織されています。まず、大変な作業に客席作りがあります。ビールの空きケースの上に足場板を置いて、その上にクッション材のシートを張って観客席にしています。個数はビールケースが300、足場板が100で、開始した当初は、近くの商店さんにビールケースを借りに行き、建設屋さんにも本当の足場板を借りに行っていました。現在は実行委員会で板を所有していますが、その置き場所が悩みの種です。当日は、午後の開演に合わせて午前中から準備が始まりますので、昼食が必要になります。その昼食は保健推進員さんが中心となり、地元飯高のお米で作ったおにぎりを食べてもらっています。これは、出演者についても同じです。

飯高檀林コンサートは、三百数十年にわたり生存しているあの素晴らしい檀林・森を、皆さんに直接見ていただくためのきっかけとして、非常に良い方法だと思っています。先ほど委員長さんのあいさつの中にもありましたが、檀林の森は人工林なので、人間の手が入らない限り維持することができません。ですから、昔から守る会の人を中心となって山掃きなどを行っています。これからも檀林の森を維持していくためには、もっと大きな力が必要になってきます。そのためには、演奏会の質を下げることなく、むしろ「あの飯高檀林コンサートにぜひ出演したい」という出演者が出るようなコンサートを目標に、これからも継続していきたいと思っています。

②タイトル：「匝瑳市の里山の生物」

報告者：敬愛大学八日市場高等学校教諭 八木 幸市

8月末にテレビ番組「ちい散歩」でトウキョウサンショウウオの放流をご覧になった方はいると思いますが、本物を見たことがないという方もいらっしゃると思いますので、今日は幼体の実物をお持ちしましたのでご覧ください。

今日は「匝瑳市の里山の生物」ということでお話をします。まず私がなぜ生き物の調査をしているかということ、先ほどの紹介にもあったとおり生物の教員をしておりまして、千葉県内の教員10名弱で県内の生物をいろいろ調べてみようということで、「千葉県の野生生物を考える会」という組織を立ち上げています。立ち上げた主な理由は、WWF（環境保全団体）から補助金をいただくためです。1990年頃からトウキョウサンショウウオの分布調査を始めまして、先ほどの野生生物を考える会を1995年に設立していますので、すでに15年以上活動をしています。

では、どんな活動をしているかということ、基本的にはトウキョウサンショウウオの産卵数を数えています。他にはアカガエル、アカハライモリ、最近ではハゼ、エビ、カメなどの保全に関する調査や、銚子や君津などにわずかに残っているアズマギクの保護活動もしています。

匝瑳市にどんな貴重な生物がいるかということですが、基準となるのは環境省が刊行しているレッドデータブック（日本の絶滅のおそれのある野生生物の種について、それらの生息状況等を取りまとめたもの）です。その中では、ホトケドジョウ、メダカ、ダルマガエル、アカハライモリ、ニホンイシガメなどが匝瑳市の里山に生息しています。

では、なぜトウキョウサンショウウオを扱ったかということですが、トウキョウサンショウウオは開発が進んでいる東京や千葉では少なくなっていて、また、里山として維持されていないといなくなってしまう生き物です。

例えば、ゴルフ場を買収された国道296号線沿いの付近に休耕田があります。休耕田というと、人の手が加わらなくなるので良いと思われがちですが、人の手が加わらなくなるとトウキョウサンショウウオの産卵場所がなくなってしまって、産卵数が減ってしまいます。

以上のことから、里山の主要生物ということで、トウキョウサンショウウオを取り上げることとなりました。

まず、県内の生息数を調べてみたところ、特に匝瑳市付近に多く生息している場所があり、それはトウキョウサンショウウオが生息するのに非常に良い環境があるのではないかとということで、生息していそうな森林や湧き水のある場所を中心に調査してみました。東京で最初に標本が見つかったのもそういう名前がついています。生息数は千葉県が一番多く、サンショウウオとしてはトウキョウサンショウウオ1種類しかいません。しかも、止水性で止まっている水の中にしか卵を産みませんので、里山の指標として適当なのではないかということです。

どこに生息しているかということ、群馬県を除く関東各都県及び福島県で、これらの地域以外には生息していません。県内では房総丘陵、九十九里平野、下総台地に生息し、ここより北側では生息していません。市内でいえば、飯高地区より北側では生息していないこととなります。干潟はもともと樺の海があった関係で生息していませんが、間をとばして銚子市では生息が確認されています。

以上は点での分布ですが、今度は面でどのような変化をしているのかということで、匝瑳市では国道296号線、広域農道、県道八日市場山田線で囲まれた内側の範囲をくまなく歩き、産卵数を数えました。調査時期は3月下旬～4月上旬で、このころは産卵が多い時期（2月～3月）の直後なので、調査に最も適した頃です。産卵数は、最も多い年で1999年に約12,000ほど、最も少ない年で2002年に約3,000ほどです。平均すると約6,000ほどの卵がこの地域に生まれていることとなります。これは他の地域に比べて非常に多い数であると言えます。水の中に卵を産みますので、2月～3月の雨が降った翌々日に多く産卵が見られます。

では、実際にどうやって産卵しているのかということ、5年前に撮影したビデオがありますので、こちらをご覧ください。

ビデオ鑑賞（トウキョウサンショウウオの産卵シーン）

これは、ちょうど産卵しているところのビデオ撮影に成功し、NHKで放映されたもので、この日も雨が降った翌々日の夜でした。

次に、トウキョウサンショウウオの生活史を見ていきます。親は本来、里山の林の中に棲んでいます。人による手入れが行われない山は竹林となっていく、中に棲む土壌動物も貧弱になっていきますので、トウキョウサンショウウオも少なくなってしまう。また、自分で穴を掘ることができませんので、他の動物が掘った穴に依存しています。竹林になるとそういう動物も少なくなってしまう。

すので、えさも自分の隠れる場所もなくなってしまうということです。

親は1月下旬～4月上旬に林から溝に降りてきて、溝に卵を産んで、また林に帰っていきます。生まれた卵は、えらが出たおたまじゃくしのようなかたちになり、7月の半ば過ぎまでには山に戻ってしまいます。山の中で3～4年で大きくなって、また産卵に降りてきます。

田んぼの管理が行われると、トウキョウサンショウウオがうまく生育できるという例を見たいと思います。農家の方が、数年に一度、田んぼの一番上の溝の掘り直しをしてくれますよね。今は用水があるので、しみ出てきた水を田んぼに入れることはないので、排水のための溝を掘ってくれているのだと思います。資料にある表の3地点では、2000年～2006年までほとんど産卵が見られなかった場所に、農家の方が溝の掘り直しをした結果、2007年に産卵数が増加しました。やはり、田んぼとして使っている里山の環境があると、トウキョウサンショウウオにとって都合が良いということです。

では、休耕田になってしまったらどうなるのかということですが、宮本と長岡新田の2地点を比較してみました。この2地点は溝の長さが同じで、環境を見ると、産卵の多い場所は土溝が多く、産卵の少ない場所は土溝が少なくなっています。土ではあるが、休耕田になってしまうと溝が少なくなってしまう。

そうすると、トウキョウサンショウウオの産卵数がどう変化するかということですが、里山として耕作がしっかり行われている田んぼが残っている場所では、土溝が多くあるため産卵も多く、一方、休耕田が多く手入れがされていない状態ですと、土溝が少なくなっているため産卵数も少ないという結果になりました。人が手入れをしている里山の環境がないと、トウキョウサンショウウオは生きていけないということになります。

そこで、私が勤務している高校でそういった環境を少しでも残していこうと、生物多様性を考える場所として「里山ビオトープ」を整備しました。これは、昨年度、県の補助金をもらって実施したもので、農家の方に協力してもらいながら整備し、学校の授業で使ったり自然観察で使ったりしています。

しかし、最近この溝にアメリカザリガニが入り込んでいて、トウキョウサンショウウオを食べてしまいます。これは人間が放してしまったことによるものですが、アライグマなどもその一例です。アメリカザリガニは何か危害を加えようとして入ってきたわけではありません。全て人間が悪いのですが、そういうことを生徒に伝えてザリガニを捕らせ、帰化動物の駆除をしています。

また、市民の方にもこういう環境を知っていただこうと、市の生涯学習室から依頼されている自然観察会や、八日市場小学校で実施しているホタルの観察会などでも、里山ビオトープへ案内しています。子どもは里山に行きますと、普段はゲームをして遊んでいますが、率先してへびやカエルを捕まえて遊んでいます。

今まで長々と話してきましたが、里山というのは生物が生息するには非常に良い環境で、特にトウキョウサンショウウオにとっては良い棲み家になっています。このへんは生息数が多いという話をしましたが、関東の中でも千葉県、千葉県の中でも匝瑳市が多いということから、匝瑳市の里山は世界一のトウキョウサンショウウオの生息地と言えるのではないのでしょうか。

4 意見交換

- ・テーマ：「地域の自然と文化 ～ 旧飯高小学校の再利用を考えて」
- ・コーディネーター：新生匝瑳戦略会議委員長 渡辺 新
- ・パネラー：飯高檀林コンサート実行委員会委員長 萱森 孝雄
敬愛大学八日市場高等学校教諭 八木 幸市
アルカディアの会 高浜 大介

[進行：事務局]

本日の意見交換のテーマは「地域の自然と文化～旧飯高小学校の再利用を考えて～」としています。ただいま萱森さん、八木さんから地域での活動をご報告いただいたところですが、お二人の他にもこの地域の自然や文化に魅力を感じて、多くの方が様々な活動を展開しています。地元の人、都会からこの地に来た人、グループ、個人…、今日は会場にお集まりの皆さんから、身近な自然と文化をつないで、さらには廃校となった飯高小学校の再利用を考えながら、地域の活性化に向けたご意見を伺いたいと思います。

コーディネーターは新生匝瑳戦略会議の渡辺委員長が務め、パネラーには先ほど活動報告をいただいた萱森さん、八木さんのお二方に加え、アルカディアの会の高浜大介さんにご協力をお願いしています。

アルカディアの会は、この地域で里山活動を行っている団体でご存知の方も多いかと思いますが、ここで高浜さんからアルカディアの会についてご紹介をお願いします。

[アルカディアの会：高浜]

初めまして。私はアルカディアの会の会員であります高浜大介と申します。今日は、アルカディアの会の代表である青木栄作さんが病床の身ということで、私が代理で伺いました。どうぞ、よろしく申し上げます。

今日こんな格好で来たのは、先ほどまで稲刈りを手刈りでやっております、なにぶん素人の趣味の範囲でやらせていただいているので、近隣の農家さんにご指導をいただきながら頑張っています。

アルカディアの会というのは、ふれあいパーク八日市場の北側で、大寺の奥の里山の中にあります。千葉県認定のボランティア団体ということで、毎月第1土曜日を定例の作業会として、会員が集まって里山の竹林伐採や整備、草刈りなど様々な活動をしています。その中で、近隣の女性の方にも10人ほどお手伝いいただいて、お昼の準備をしてもらい、みんなでボランティア活動をした後にご飯を食べるという活動をしています。

年間のスケジュールとしては、定例作業日の他に里山ウォークという活動や、地元の保育園、幼稚園、ガールスカウト、ボーイスカウトの里山体験の受け入れ、秋には感謝祭ということで音楽イベントも毎年行っています。

おかげさまで、2007年には千葉県認定の教育の森に指定され、公的な支援も少しいただいています。今、里山活動は非常に注目されていますので、企業の方からも少しずつ寄付金を出していただいています。

アルカディアの会の成果の一例としましては、恥ずかしながら自分がそうであると思います。というのは、アルカディアの会に通うようになってから、昨年8月に男3人で移住しまして、家を借りて住んでいます。そこで引続き田んぼをやらせていただいています。

私から申し上げたいのは、都会からすると、農業、田舎、地方、里山というところが非常に注目されています。その中の一人として、私は移住まで決めて、現在は東京と匝瑳市を行ったり来たりの生活をしてはいますが、そういう成果が生まれています。

やはり3月11日以降、都心での脆弱性にリスクを感じている人は少なくありません。今日は稲刈りイベントで東京から20人ほど来ていますが、その動機としては、普段スーパーで購入している食材がどのようにして作られるのかということに非常に興味があり、レジャーではありますがやってみたいというニーズがあるので、そういう方が参加しています。

農家の方からしたら「甘いぞ」と言われてしまうかもしれませんが、都会では

そういった自給自足の生活をちょっとやってみたいという動きがあり、そんな中で私も匝瑳市に注目し、アルカディアの会を通して移住も決めています。都会から年間延べ2,000人くらいの人が、田んぼや各種イベントに参加しに来ているということで、そういう場所がこの近くにあるということを皆さんに知っていただければと思います。以上です。

[進行：事務局]

高浜さん、ありがとうございました。

それでは、意見交換に移ります。ここからは、コーディネーターの渡辺委員長に進めていただきます。なお、意見交換において発言される際は、係員がマイクをお持ちしますので、お住まいの集落名又は所属の団体名、お名前をおっしゃっていただき、ご意見をお聞かせくださるようご協力をお願いします。

それでは、渡辺委員長よろしくをお願いします。

[コーディネーター]

先ほどの高浜さんのあいさつとアルカディアの会の紹介の中に、私が狙っていたことをしっかり入れていただきました。それは「都会から」という言葉で、今後、里山とか農村景観などを考えた場合、重要なポイントになってくると思います。そのことも含めて、このあと意見交換会を進めていきますが、どこかのテレビ番組のようにシナリオはありませんので、どういう話が出るかはわかりません。戦略会議でいつもどういう話が出るかわからなくて、事務局がいつもヒヤヒヤしているというのが日常なので、同じようなことが起こるかもしれません。

意見交換に入る前に、先ほどのAさんとBさんの報告に一言言わせてもらおうと、実はAさんの報告は一度戦略会議でも聞いていまして、やはり敬愛大学八日市場高校には良い先生がいるな、というふうにつくづく感じました。スライドに分布地図が載っていましたが、報告にすると一枚で終わってしまいますが、あれを作成するには大変な労力だったと思います。そういうところまでぜひ考えていただければと思います。

それからBさんの報告ですが、一言で言えば「Bさん、あんたは偉い」ということでしょうか。市から補助金が出て実行委員会も組織して、今流行りの市民協働に近づいているのかなという気がします。

では、早速意見交換に入りたいと思いますが、まず、先ほどの高浜さんの話の中で里山整備の関係が出てきましたが、生物多様性の側面から考えた場合、ただ手入ればすばいいというわけにはいきませんよね。

一つの例として、横浜市で里山を守る運動は盛んに行われていますが、生物多様性の専門家が抜けた後、やたらと手を入れ過ぎた結果、生物多様性に大きな影響を与えてしまったという失敗例もありますので、これは重要な問題だと思います。

里山の整備や管理の具体的な活動について、Cさん、Aさんいかがですか。

[パネラーC]

里山整備については、計画立ててやっているという情報は知りませんでした。私たちはボランティア団体ですので、都会から来た人は地元の方に教わりながら、竹を切ったり運んだりするぐらいで、専門的にやっているというわけではありません。その点については、ぜひご指導いただきたいと思っています。

[パネラーA]

管理の方法は難しい問題です。昔ながらの活用が一番だと思いますが、現在、焚き木を取りに山に行く人は皆無ですよね。持ち主が自主的に管理していくのは難しいので、住民を巻き込み、何か遊びを兼ねて林を手入れしていくような方法を考えていく必要があります。

良くない例として、天神山公園と火葬場の整備があります。整備する前までは、里山付近にトウキョウサンショウウオの産卵場所があったのですが、施設の整備とともにいなくなってしまうました。里山を人間が利用する場合には、そこにいる生物についても考えていかなければならないのだと思います。

しかし、行政の方も事前に相談すれば対応してくれます。整備計画があった場所に「貴重な生物がいるので」と相談したら、工事の時期や場所、方法を変更してくれました。天神山や火葬場の整備についても、貴重な生物がいるということを知らなかったのだと思いますので、事前にそういう生物がいるかどうかについて知っておく必要があるのではないのでしょうか。

[コーディネーター]

農薬などは生物に影響がありますか。

[パネラーA]

トウキョウサンショウウオに関して言えば、農薬をまく時期と場所の関係から、ほとんど影響はありません。ただし、ホタルに関して言えば、畦（あぜ）の中にさなぎを作っているので、除草剤でほとんどやられてしまいます。

[コーディネーター]

Cさんいかがですか。

[パネラーC]

すいません、アルカディアの会でどういう専門性を持っているかということ、私が存じ上げないので、いろいろな専門性を持った方にいらしていただいて、その場その場で知見を披露していただき、私たちも勉強している次第です。

[コーディネーター]

里山の問題で一番難しいのは、Aさんの生物多様性やCさんの里山整備活動のように、里山に対する考え方、価値観がそれぞれ異なるということですよね。今後、里山として維持管理していくこととなった場合、これらの多様な考えをどのようにまとめていくかというのは、非常に大きな問題だと思います。

かつては里山を管理することで、落ち葉などを集めて農業の堆肥として使うなどの経済的価値があったわけですが、今はもうありません。維持管理と言葉では簡単に言うてしまうのですが、地元の代表としてBさんいかがですか。

[パネラーB]

会場を見ると、山を愛してひたすらきれいにしている人たちもいますが、考え方としては、中途半端にやる以外にないと思います。何かを求めて管理するというよりは、自分の持ち物として割り切って管理していく以外に方法はないと思います。

農家の長男に生まれ、いやでも何でも受け継いでいくという使命みたいなものを感じて、お金にはならないが昔からあるからきれいにしようということをやっているが、勤めをしている関係上、なかなか管理ができないというのが現状だと思います。

おそらく飯高の大半の人は、持ってしまったからとりあえずきれいにしておく、という考えの人がほとんどだと思います。

[コーディネーター]

非常に率直な意見だと思います。

それともう一つ、先ほど里山については多様な価値観があるという話をしましたが、Cさんから話のあった都市住民との交流活動も、一つの生き方や価値観の問題だと思います。それらは、もしかしたら地元ですぐに受け入れてもらえるかもしれないし、そうではないかもしれません。その辺について、Cさんはどのように考えていますか。

[パネラーC]

正直なところ、私たちのことを快く思っていない方もいらっしゃると思います。

都会からいきなり来て、田畑の管理が本当にできるのかというふうに思っている方も当然いらっしゃると思います。

都会の住民も、いきなり移住というわけにはいきません。仕事と家族を持っていますので、それでも土日に車で通ってきて、やれる分だけの作業をやって帰っていきます。

特に今は、年代によって価値観が全く異なります。私は 30 代ですが、60 代や 70 代の人との会話では、生きてきた背景、ものやお金に対する考え方がだいぶ違うので、それでも自分たちの活動を理解してもらおうと、なるべく周囲の方とは対話していこうと努力しているつもりです。

[コーディネーター]

農村の生活は、集落での付き合いというのが大事ですよ。伝統的な集落では、一部排他的な部分もあると思いますが、都会から来た場合、集落にうまく溶け込んでいけるのでしょうか。

私はもう 50 代の半ばになりますが、高校まで匝瑳市に住んでいて、やはり農村部での集落の付き合いというのがいやでした。東京に出て、マンションに鍵一つで出入りできる環境の方が楽でした。しかし、50 歳を過ぎて思うことは、やはり地元に戻ってくると郷愁を感じますが、では私がいま地元に戻ってきて地域に溶け込もうとすると、その仲間に入っていくことは難しいのではないかと思います。

Cさんは、すんなり入って行けましたか。

[パネラーC]

私が移住してきた市内の集落では、ドブ（側溝）の清掃が数回あるぐらいでそれほど地区の行事などはありませんが、基本的には「郷に入っては郷に従え」だと思います。

現在は市商工会青年部にも入部し、8月の八重垣神社祇園祭では神輿を担がせてもらいました。やはり地域の中に飛び込んでいき、地元の方と積極的にコミュニケーションをとっていくということが大事だと思いますが、私もまだそのプロセスの途中にいるので、ぜひそのへんはご指導いただきたいと思っています。

[コーディネーター]

もし、Cさんのような方が近くに寄り住んで来るとしたら、Bさんはすんなり受け入れられますか。

[パネラーB]

お互いにプラス要素が持てるかどうかだとは思いますが、都会で仕事を持っているので土日に遊びがてらやるという人と、必死になってやっても生活ができないという地元の集落とは、そう簡単にうまくやっているとはいえません。

実際に都会から来た人に聞いてみると、集落の諸行事にはやはり参加しづらいということですし、面倒な部分もありますので、先ほどコーディネーターが言われた通り、鍵一つで生活できた方がさっぱりしているのかもしれませんが。

農村部では、お互いに助け合って生活してきたこともあり、そういう排他的な部分があるのかもしれませんが、それでも最近は薄れてきている方だと思いますので、もう少し時間がたてばなじんでいけるのではないのでしょうか。

[コーディネーター]

飯高檀林コンサート実行委員会の委員さんは、みなさん地元の方ですか。

[パネラーB]

そうです。地元住民と地区の各種団体、市の教育委員会で組織され、当日は約60人のスタッフで運営しています。

[コーディネーター]

この組織に、例えばCさんたちが入ることは可能ですか。

[パネラーB]

可能です。当初は毎年実行委員会を解散し、実行委員を募集していましたが、なかなか手が増えていかないということもあり、今は実行委員会を解散せず、そのまま継続させています。1回参加したからといって、そのまま実行委員に入れるということはしていませんが、継続して作業に徹していただける方であれば歓迎します。

[コーディネーター]

飯高檀林は匝瑳市の宝だと思います。それを維持していくためにBさんたちは活動されていますが、今の実行委員会を維持していくのは可能ですか。

[パネラーB]

今やっている人が高齢化しなければ大丈夫だと思いますが、先ほどCさんも言っていたとおり、世代間で価値観が違いますので、どんなに素晴らしいコンサートができたとしても、新しく若い方が入ってきてくれるというわけではありません。将来を考えると不安ですが、しばらくは現状を維持できると思います。

[コーディネーター]

戦略会議の中で地域福祉を話題に取り上げたことがあります。障害者を「施設

から地域へ」という考えで活動されていた方の報告でしたが、この場合、障害者が地域に本当に溶け込めるかどうかだと思うんですよ。報告を聞いた後では、まだリハビリの延長ではないかな、と感じざるを得なかったわけです。

同様に、Cさんのように都会から来た人も、地域に溶け込んでいけるかということが問題で、この点についてCさんいかがですか。匝瑳市民としてやっていけそうですか。

[パネラーC]

とりあえず住んでみるというところから入ってくる人もいますが、私は匝瑳市に骨をうずめるつもりで移住しています。地域に溶け込みたいという思いはありますが、最終的に受け入れてもらえるかどうかは、地域の方が判断することだと思います。

[コーディネーター]

地元の方に受け入れてもらえるかという問題はあると思いますが、それ以前に生き方の問題として、何らかの哲学があっここに来ているのだと思います。Cさんはアースカラーという組織の代表をされていますが、その言葉の意味もホワイトカラー・ブルーカラーに対する言葉で、そこに何らかの意味合いを持たせていると思います。その一つの表れが匝瑳市に来たということではないでしょうか。Cさん、いかがですか。

[パネラーC]

おっしゃる通り、アースカラーという名前は「大地に根ざす」「地球環境を良くする」「職業人になる」というところからきていて、私たちの生き方そのものです。都会でそういうあっせんをしている会社も多少あると思いますが、私は都会にいただけでそういうことをするのではなく、自分も実践した上で、地域や農業の魅力を伝えていこうと思っています。

[コーディネーター]

これは人の生き方の問題ですので、どうこういう話ではないのですが、現実的な問題として、地域で受け入れてもらえるのか否かという問題は残ると思います。

そしてもう一つの大きな問題として、里山、飯高檀林、生物多様性などのいろいろな考え方がある大きなゾーンの中に、小学校の跡地ができてしまったわけです。これをどう活用していくか、どのような可能性があるのかを探っていきたいと思います。

これについて、市の文化財審議会委員もやっているAさんに生物多様性の観点

から構想があるということですので、それを一つの参考として意見交換に入っていきたいと思います。

[パネラーA]

私的な考えですが、歴史ある檀林、自然あふれる里山、素晴らしい施設の小学校を関連させて活用できればと考えています。

例えば、檀林そのものには資料展示が困難で、講堂の中にも普段は入ることができません。そこで、檀林の歴史的資料を展示するコーナーや、それだけではなく、匝瑳市の文化、歴史、建造物などを紹介するミュージアム的なものに使えるらいいのではないのでしょうか。

もう一つは、子どもたちが檀林で勉強をし、自炊や体験学習もできる場としての活用です。全て自炊というわけにもいきませんので、地元で食事のお手伝いをするように受け入れ、里山であれば一緒に山に入って手入れを体験させます。自然の中に入っていけば子どもたちはいろいろなことを発見し、感動します。そういう体験自体が少なくなってきましたので、こうした環境を作ってあげるのもいいのではないのでしょうか。

[コーディネーター]

私はこのAさんの報告に非常に興味を抱きます。それは、匝瑳市には資料館のような文化財を展示する場所がないからです。

「しりょう」にも「資料（もの）」と「史料（文書）」があります。合併前、野栄町史を作るときに、個人から集めた史料がいっぱいありましたが、最終的には個人に返してしまったのです。町制施行40周年のときに、『いま、野栄をふり返る』の執筆を頼まれ史料をもう一度集めたのですが、やっぱりなくなっているものもありました。

歴史的史料については、一度失ってしまうと二度と手に入れることはできません。いま東日本大震災の被災地で、NPOが史料の散逸状況の調査と保存活動を展開するネットワークができたりしていますが、歴史史料がなくなるということは、そこに住んでいた人の地域の生活を復元することができなくなってしまうということです。そういう価値のあるものをしっかり保存していく場所、また、管理していく体制を整えることは大事なことだと思います。さすがに、現在は箱物を造ることはできませんから、こういう跡地を利用して文化的な施設をつくるということは可能だと思います。

もし文書館があればアーキビスト（公文書館などで調査研究にあたる専門職

員) がいて、公文書の収集や分類、保管を行っています。公文書は、行政として使う価値観と、文化財・歴史的史料として使う価値観とでは、やっぱり違います。国の機関で、竹橋にある公文書館ではそれをやっています。地方にも広がっていきうということをして十数年前からやっているのですが、こういうことも含めて文化財というものを考えた方がいいと思います。そういう意味では、Aさんの構想は一つの考え方としてあってもいいのではないのでしょうか。

また、地域の方にも農村を巻き込んだいろいろな考え方があると思います。Bさん、いかがですか。

[パネラーB]

飯高小学校が廃校になるという時に、ふれあいパークの会長さんから「小学校の跡地で農業体験ができないか、人はこちらで集めるから」という話もいただいています。飯高では農家の高齢化も進んでいますので、この先農地を再活用していくためには、いい考えではないかと思います。すでに金原新田では農業体験をやっていますので、そこにCさんの活動で都会から人が来るのであれば、そういう人たちが利用する宿泊施設があってもいいのではないかと思いました。

また、オープン・ガーデンという個人の庭を公開する活動も行っていて、これを小学校を基点にもう少し幅広く展開できないかと考えています。

[コーディネーター]

先ほどから、BさんとCさんの間には溝があるのではないかと感じていたのですが、溝が埋まりましたね。

宿泊施設を絡めた学校の利用ですが、私が前に関わったところでは宮城県の旧中新田町で、今は合併して加美町になっていますが、田んぼの中にバッハホール(公営の音楽ホール)というのがあって有名でした。当時、本間さんという町長に頼まれて私も関わっていました。

そこには旧鳴瀬小学校の跡地があって、2階建ての木造校舎を宿泊施設にしてあるんです。それで、宿泊施設は良いなと思っていたのですが、旧中新田町と匝瑳市で決定的に違うのが、校舎が木造だったことです。旧飯高小学校は、全国どこに行ってもあるようなコンクリートの造りで、同じかたちをしていますよね。後のことを考えて造れとは言いませんが、もう少し地域の個性とかを考えて設計したらどうなのかなと思っていますね。

宿泊施設については、Cさんいかがですか。

[パネラーC]

国（内閣府）の事業で、都市から農村に人を送り、農村で仕事を作るという事業をやっています。匝瑳市にも月2回、5～10人ぐらいを呼んで、農業体験などをやらせていただいています。その際の宿泊施設に大変困ってしまっていて、もしこの小学校を都市と農村の交流拠点として使わせてもらえたら、大変ありがたいお話です。

しかし、利用するには必ずお金の問題が出てきます。維持管理費や改修費もそうですが、最小の費用で最大の収入が得られるような仕組みづくりが必要で、それには外から来る人にお金を落としていってもらわなければならないかもしれません。

実際に体験研修をやりながら思うことは、農村での知恵や技術というのは、都会の人から見れば宝の山なのです。そこにお金を払ってくれるということはあるので、地域の人には今までの経験や知恵を伝承できる場として活用できればいいのではないかと思います。

[コーディネーター]

この3人の方の話聞いて出てきたのは、里山の自然環境を生かしながら、一つの景観という中で文化財や檀林を位置付けていく視点と、もう一つは匝瑳市と都市部の交流、ふるくて新しいテーマですが都市と農村の交流を図っていくという視点です。

それではこの後、皆さんから意見を伺いたいと思いますが、私たちは行政の代表ではありませんので、行政批判でしたら後日、市役所や議会へ行ってください。ただし、多少批判めいたことでも、生産的な議論でしたら私の判断で受け入れます。

3人の方への質問でもけっこうですし、旧飯高小学校の利活用の関係でもかまいません。いかがでしょうか。

[参加者D]

先ほどの話で、旧飯高小学校を都市と農村の交流拠点や宿泊施設として活用してはどうかという話がありましたが、これらはお金のかかることで、地元でそれを負担しましょうというのは無理なことだと思います。

現在、戦略会議でいろいろ議論をしていると思いますが、そういう資金的な部分について、戦略会議で市と交渉してもらえないでしょうか。

[コーディネーター]

予算化と施策化は行政内部で議論すべきであって、戦略会議にそのような権限

は無いし、戦略会議の役割ではないと思います。戦略会議は、市のまちづくりに対する方向性や意見を出すべき場であって、具体的な予算を審議する場ではありませんが、そういう部分も含めて検討してくださいという提言はできると思います。

[参加者D]

議会における市の答弁でも、旧飯高小学校の利活用については「戦略会議で議論する」ということになっていますので、具体的な予算措置まではいかなくても、そういうことも含めて検討してもらえるような働きかけをお願いします。

[コーディネーター]

小学校の施設を利用する場合、例えば耐震補強の問題とかも出てくるとと思います。これは当然予算がかかることですが、はっきり言ってしまうと、匝瑳市にお金があるとは思えません。そういう状況で新しいことを実現するには、市民と行政がコラボレーションしながらまちづくりの仕組みを進めていった上で、予算も決まってくるのだと思います。そこまでは、戦略会議で言わせていただきたいと思いますが、先ほど言いましたように、予算化や施策化は行政の仕事で、戦略会議の役割はその方向性を検討するところまでです。

[参加者E]

先ほどの旧飯高小学校の利活用の話を聞いていると、地元の人には出てこない大変いい案だと思います。戦略会議でいくつか案を出してもらって、市へ提言し、そしてこういう会議を地元で開いて、説明するやり方がいいのではないのでしょうか。

地元の社会福祉協議会では、県から予算をもらって3年間にわたりフォーラムというかたちで勉強しました。旧飯高小学校の施設をどうしようかという話し合いを続け、時には県外視察も行いました。そういう実績を戦略会議でも調べ、基礎知識を得た上で、案を出してもらいたいと思います。

視察先では、廃校になる2～3年前から、跡地の利用について地元と話し合いを進めていました。しかし、匝瑳市ではそれがありませんでした。今までの議論を白紙で考えるのもいいことですが、その前に戦略会議にかける資料は、市で事前に作っておかなければならなかったのではないのでしょうか。すでに戦略会議も9回目を迎えるわけですから、そういう案を提出していてもいい頃だと思います。

先ほど議論されていた内容は非常にいい案だと思いますので、飯高地区だけのものではなくて、全国から視察に来るようなそういう施設にしてもらいたいです。

ただし、過去の失敗を繰り返すことだけはしてほしくないと考えています。

[コーディネーター]

戦略会議では7月に市民病院への意見書を提出していますが、ご覧になりましたか。

[参加者E]

毎回ネットで見ています。

[コーディネーター]

意見書をご覧になってどう思われましたか。

[参加者E]

ここであなたと議論する必要はありません。

[コーディネーター]

それでは仕方ありません。市民病院への意見書や戦略会議の会議録は、全てホームページで公開しています。意見書を見ていただければわかりますが、具体的な改革については病院内部で行うことで、それをどういう方向で実施するのかという方針を出した意見書です。2年間というスケジュールで、市から出された多くの懸案事項を協議していかなくてはなりません。今その全てに手を付けてやっていますので、それをまとめていくにはやはり時間がかかります。

現在は中間報告をまとめる段階に入っていますので、それが出たときにはぜひご覧いただきたいと思います。

[参加者F]

先ほどBさんからも話がありましたが、もし飯高小学校が廃校になるようなことがあれば、ふれあいパークと協力してやれる場所にしたいという話を何度もしてきました。

いろいろな意見が出ていましたが、里山を維持管理していくのは非常に難しい問題だと思います。これは、全て個々の持ち物で、やりきれないから放棄してしまっているという状況があるので、それを復活させるには5倍も10倍も手がかかります。なので、里山についてはまた別に考えるとして、まずは旧飯高小学校、檀林、ふれあいパークを連携させ、匝瑳市を広く皆さんに知っていただきたいと考えています。

私もいろいろな先進地を見てきました。和歌山県にある秋津野ガルテンという廃校になったところでは、その後長い間放置されてきたわけですが、地域の人たちが独自に立ち上がって、販売施設や宿泊施設をどう運営していくかということ

について、行政も交えて検討を行ったようです。しかし、まずはそこに携わる地元の間が協力し、意見を出し合ってやらないことにはどうしようもないことだと思います。

ふれあいパークについても、なるべく行政に頼らないように自分たちでできることは自分たちでやるようにしていますので、旧飯高小学校の利活用についてもぜひ一緒にやっていければと思っています。

若い人でも農業を始めている人はいます。興味のある若者が入ってきてくれれば、指導してくれる先輩もいますので、そういう仕組みを皆さんで考えていければいいのではないのでしょうか。

[参加者G]

自分は元々この地域に住んでいました。一時期は東京に住んでいましたが、やはり地元がいいと思い直し、匝瑳市に戻ってきて家族と暮らしています。

いろいろ話を伺ってみて、問題は全て共通していると思いました。一番大事なことは、これらのことは「私たち地元のためにやることである」ということで、Aさんのやっつけらっしゃる野生の生き物を守るという活動も、回りまわって自分たちに返ってくるので、取り組もうということだと思います。

そういう問題をクリアしていくためには、まずそういう活動に関心を持ち、自然や生き物が大切だという心を持った子どもたちを育てることだと思います。小さい頃の体験は非常に重要で、大人になってようやく自分も消防団やJICに入って、少しずつそういう活動をやらせていただけるようになりました。

私の出身である豊和小学校も、将来的には飯高小学校と同じようになるのではないかと思います。どう頑張っても人口減少は止められませんので、その時にはここでの考え方や活動は非常に参考になると思います。私たちにもできることがあれば、ぜひ協力させていただければと思っていますので、よろしくお願い致します。

[コーディネーター]

子どもたちにとって、環境というのは非常に良い教材ですよ。最終的には自分たちに返ってくるというお話でしたが、今日、Cさんに来ていただいたのは、今まで表には出てこないが実際に興味を持って活動されている人たちで、市民側からそういう組織作りへの足がかりになれば、ということが狙いでした。

もしこういう施設を資料館や宿泊施設として実際に管理していくこととなった場合、行政だけではやりきれません。やはり市民ボランティアやNPOも含めて、

市と市民が協働でやっていくしかないのだと思います。そういう仕組み作りのきっかけになればいいなという思いで、今回のフォーラムを企画しました。

[参加者H]

先ほど、博物館、資料館、檀林、里山、自然というようなお話も出ていましたが、平成16年に千葉大学の教授から提示された調査報告書があります。その中に飯高寺を中心とする郷里を育む里山ということで、箱物ではなく、飯高まるごと体験博物館というものをやったらどうかという報告書が出ています。

これをご覧になった方は多いと思いますが、先ほどいろいろなお話があったように、都会の人たちに来てもらって、体でまるごと飯高を体験してもらおうというものです。

こういう提示を受けて、私はそういう人たちを受け入れるビジターセンターとして旧飯高小学校を活用し、当面は小学校の景観を維持しつつ、校庭をみんなで整備しながらいろいろな活動に利用できればと思っています。

私は平成16年からオープン・ガーデンを開始し、トータルで2,263名の来場者となりました。ただ庭を見ていただくだけではつまらないので、1人500円をいただき、その中からお茶と饅頭を出して、残ったお金はNGSジャパンというNPOを通してチャリティーしています。

何が言いたいかというところ、本日いろいろな意見が出ていますので、その内容を踏まえて、せっかく素晴らしい里山や自然、檀林があるのだから、なるべくお金をかけずにそれらを生かしていく方向でやっていけたらいいのではないかと思います。

[コーディネーター]

私もオープン・ガーデンに興味がありまして、無料ではなく入場料をとって、さらにチャリティーをされているというところが良いと思います。

先ほどもお話しましたが、すでにそういう活動をされているHさんのような方からの意見を伺いたいということと、そういう人たちを集めたかったというのがフォーラムの意図でしたので、大変ありがたい発言でした。

しかし、NPOなどの市民団体がやろうとする時、現実的にはお金がないとかなかなか動けませんよね。日本ではあまりなじみがないかもしれませんが、寄付活動もどんどん活用していくべきだと思います。

本日、いろいろな意見を伺っていて、新しい市民参加の方向ができるかもしれませんし、実際におもしろい仕組みができるのではないかという感じがしてきま

した。おそらくBさんのような方がたくさんいれば、市民が中心となっていていろいろな活動が起こると思います。

少なくとも、現在、何でも市からお金をもらう、何でも市にやってもらうというのは厳しいと思いますので、市民中心の市民による管理を、行政と一緒にコラボしながらやっていくという道を模索していくべきだと思います。

時間も過ぎていきますので、最後に3人の方から一言ずつお願いします。

[パネラーA]

今日地元の皆さんからいろいろお話を聞いて、この場所が本当に良い利活用につながればと思っています。今後とも協力していきたいと思っていますので、よろしくお願いします。

[パネラーB]

私も地元の社会福祉協議会の会議に出席させていただいていますが、やはり地元のやる気が一番大事だということをいつも言わせてもらっています。まずは地元で立ち上がってやってみるということが、いろいろな事につながっていくのではないかと考えています。これからもよろしくお願いします。

[パネラーC]

私がやっていきたいのは、とにかく都会からこの匝瑳市へ移住者を増やしていくことです。人口減少がすでに始まっていますので、皆さんが元気なうちは大丈夫ですが、数十年先を考えると大変なことになるのではないかと考えています。お子さんやお孫さんが喜んでこの匝瑳市に帰って来られるような、そんなお手伝いができたらと考えていますので、よろしくお願いします。

[コーディネーター]

今、人口減少の話がありましたが、少子化対策がどんなに進んでも、おそらく人口減少を緩やかにするぐらいしかできないと思います。過去の歴史を見ますと、人口が増加した時に開発が行われ、その際に里山がなくなっています。人口が減少していく中で、人と自然との関係をもう一度見直しながら、新しい匝瑳市をデザインしていくという作業が必要だろうと思います。人口が減少することを前提としたまちづくりや各種計画を作っていかなければならないのだと思います。

今までは人口が増加することを前提に振興してきましたが、今はそういう時代ではありません。そういうときに見つめ直すべきもの、重要な価値を見出せるものが、里山や里海なのだと思います。

今日はつたない進行で申し訳ありませんでしたが、以上で意見交換を終わりに

します。ありがとうございました。

5 閉 会